



# 安養寺便り

弘法大師建立して寶鏡寺門跡の理窟堂

安養寺便り  
第42号  
平成27年  
12月吉日



## 平成丙申歳を迎えて!

昨年末漢字一字「安」が発表されました。

「安」は、当山安養寺の大切な冠でありまして、やすらか、やすんずる、安心、安全、安易、安保、安定、安堵、安静、など等、心穏やかな平和的な思いが連想されます。仏教的には安心(あんじん)とは、究極的な目的として使われておりますが、生涯を通じて追い求める仏教的世界観であり、信仰心の根幹をなすものでしょう。

一般的にはどのようなにして生まれ、育まれていくものなのでしょう?

我々には通常、絶対的、普遍的な仏様さまに安心を求めてまいります。通常はむしろ自身のご先祖様であったり、先に旅立たれた身近なご親族

から受けられた深い想いから、生涯を通じての指針とされ、共に活かされながら心の支えとされておられることに、まさに深い信心の真心を感じざるを得ません。

小生にも先月、四歳違いの兄上の十三回忌を終えたばかりですが、私の五感には今は亡き両親はもとより、亡き兄上や慈苑大姉は私にとってこの世の守り本尊で、今も尚私の心の支えであり、常にどんな判断をするだろうか、と自問自答しながら何時も想いを馳せているのが正直な気持ちであり、自分自身の安心(あんじん)のために袴りを捧げているような気がしてなりません。

檀信徒各位におかれましては、毎年の春秋の彼岸会や盂蘭盆会に、懸命にご先祖様を供養されるは、ご先祖様たちとの心の対話であり、大変意味深いことと念われます。

家族自身に対しては、当山のご本尊さまの御庇護のもと、お大師さまのお導きに預かり、お正月の修正会や節分会、

弘法大師88ヶ所霊場  
東方山安養寺  
520-3015  
栗東市安養寺88  
Tel 077-552-0082  
Fax 077-552-9151  
URL  
touhouzan-anyouji.com  
E-mail  
to-anyouji@nifty.com

四国遍路詣り、青葉祭りや秋の大祭、お餅つきや暮れの除夜の鐘への所願成就の祈りは、我々生きとし生けるもの現世の勤めであり、いずれまたいつの日か、お出合い出来るための修行の賜物と確信致す次第でございます。

住職合掌礼拝



### 秋季庭園 庭師手入れ



### 本堂薬師堂修復 完納志納者一覽

(敬称略)

- 十五口 一坪 徹夫
- 十四口 武田 博
- 十一口 福本 経子
- 十口 上村 寛
- 十口 久木 伊勢雄
- 十口 浅野 重雄
- 十口 秦 良子
- 十口 大角 光子
- 七口 横山 英雄
- 七口 後藤 千恵子
- 七口 羽後 富美子
- 七口 山上 高治
- 七口 金子 舜次郎
- 七口 加賀田 住江
- 七口 西尾 純一
- 七口 小島 頼信
- 七口 森 春江
- 七口 原川 博善

### 平成二十七年 本堂薬師堂修復管理 基金志納者 (敬称略)

- 十口 大山和伸
- 五口 岡本光代
- 五口 高尾 屹
- 三口 吉羽弘子
- 石井 幸保
- 野玉 幸

一口

- 大西敦司
- 四方隆
- 川村多恵子
- 出井安正
- 紙崎和子
- 小林友子
- 瀬戸重雄
- 村上イト
- 石田敬一
- 熊谷純一
- 金井万平
- 兵井康久
- 川會弘美

一口

- 吉津政昌

一口

- 榎原孝司
- 坂中房子
- 田口光雄
- 滝敏彦
- 利藤力ヲル
- 時岡秀男
- 晶貴正巳
- 有友喜久子
- 今泉治武
- 千田二三夫
- 田中祐二
- 岩元俊子
- 米谷訓
- 林美照
- 岩崎皓二
- 松田義勝
- 安田昭
- 中西新次
- 長岡保子
- 山下滋之
- 中村佳代子
- 長濱吉章
- 西脇敏弘
- 平田恒美
- 薦田孝一
- 大野直

- 堂ノ尾 勇人
- 矢代 眞佐博
- 大杉 心み枝
- 坂田 加代子
- 福井 登志子
- 宇田 美佐子
- 湯浅 三郎
- 橋本 律雄
- 岡本 ツヤノ
- 岩井 宏之
- 藤井 勲
- 鈴木 政人
- 田中 克和
- 金澤 利美
- 杉本 茂
- 山田 憲作
- 石井 康允
- 宇野 洋一
- 木下 繁一
- 山口 久彦
- 山本 勝彦
- 合田 俊英
- 藤原 宏
- 西村 弘幸
- 岡田 敏広
- 栗田 俊一
- 河原 邦祐
- 田邊 夕ツ子
- 北村 貴行
- 坂口 善行
- 高岡 昭子
- 久保 正之
- 野口 美智子
- 佐藤 敬子
- 藤本 敬浩
- 赤木 弘之
- 勝部 利之
- 加藤 房成
- 衣川 俊成
- 細川 忠成
- 吉廣 恵里子
- 井筒 可里子
- 西川 富子
- 宮崎 藤子
- 沖田 秀勝

# 秋季大祭祭文

夫れ惟れば東方山の頂き静隠にして  
芙蓉の霊峰は碧空を仰いで聳立し秋の彩  
丹を投じる。山麓一帯に建立せり四国八  
十八カ所をゆかりとする霊場は紅葉一色  
に染まり爽朗なる坊舎の甍と相見えて、  
密厳浄土の粧いを凝す。げにや安養の寺  
号は、密厳浄土 安養浄土を今の世に顕  
現せしものと謂つ可し。

斬に恭しく安養寺本尊薬師如来 観  
音堂本尊観世音菩薩の降臨影向を仰ぎ、  
謹しんで真言教主大日如来 両部界会  
諸尊聖衆 別しては十六善神を奉り、  
安養寺秋季大祭を執り行つ。

当山は遡れば奈良時代天平十二年・  
聖武天皇の発願により、同天皇が深く  
帰依せし高僧・良弁僧正の開創になる  
浄刹なり。更に以後、平安時代には真言  
宗宗祖弘法大師が承和元年に堂宇を再建  
し、大師を中興の祖と仰ぎ大師信仰発揚  
の尊き真言密教の霊跡となる。

ここに弘法大師のみ教の根源を記すと、  
大師は何人といえども排除することなく  
各人の個性の特徴を評価され、それなり  
に生きる秘密の眼をもって、常に国家の  
安泰と国民一人一人の幸福・濟世利人に  
心を砕かれる。

当山も大師の再建・中興以来、歴代住  
職が世の苦しみ、人の苦しみを薬師如来  
に抜苦与楽を、あるいは、幸せを求めて  
福寿海無量の観世音菩薩に念彼観音力、

妙智力を授からんことを至心に祈る。こ  
れ全て檀信徒への教化の活動、働きて  
仏恩報謝の赤誠の心なり。

昭和・平成の時代を迎え、当山の信仰  
倍增へ尽力する熊谷俊亮住職は、菩提心  
堅固にして、知恵にすぐれ慈と悲、優し  
さと強さを備え得る至宝なり。密教僧を  
自得して真理をタテ系に、人の願いとす  
ることを理解し、個々の特性にあつた指  
導をヨコ系に展開し、益々密教の師とし  
ての資質を發揮され、めざましい寺門の  
興隆をみるに至る。まさに俊亮住職の  
実践躬行のたまものなり。本日当山の本  
尊薬師如来宝前に於いて真言宗当山修験  
の紫燈大護摩供が練達の修験道の験者ら  
によつて執行される。

それ修験の大乗は金胎不二の妙典に  
して、秘密大曼荼羅を布設し、火生三昧。  
その旨趣を如何なればと問うと、国家  
安穩、流疫消滅にして五穀豊饒 特には  
信心の施主・篤志各位の家内安全 子孫  
長久 諸願成就 皆令満足なりと。殊  
に当山においては、先ぬる平成二十四

年一月二十一日、慈愛溢れる直子寺族夫  
人・法号寂光院覚慈祥大姉が無常の風  
に誘われ突然の旅立ち。大姉は四十年間  
に亘つて、俊亮住職を助教し令息道玄師  
の養育、檀信徒の育成を扶助して  
八面六臂の連日なりき。その間、寸暇を  
拾いてご詠歌の修練、ご詠歌伝道に奉仕  
を尽くす。その功績は欣慕されて止まる  
ところをみず。痛ましく悲しい哉。され

ど忽ちにして涅槃の床を示して化儀の世  
界を現す。靈魂速みやかに阿字の本土に  
帰還す、と。

仰ぎ願わくは本尊聖者を始め奉り、  
両部界会の諸尊聖衆 曩租神変大菩薩  
中興理源大師等 末資が無二の丹誠を  
照覧して焚焼の法味を納受し、益々  
威光を増長して摂化衆生の勝益を施  
し給え。  
伏して乞う。  
一天四海 風雨順時 五穀豊饒  
萬民快樂

殊には本日ご参詣の面々  
家内安全 息災延命 子孫長久  
福寿圓滿 乃至法界 平等利益  
維時平成二十七年十一月八日  
京都府向日市  
亀光庵住職 土口哲光敬白



客殿雨樋取替修理



玄関工事

完成した  
工事現場

平成二十七年度(二回目)

本堂薬師堂修復管理基金

志納者(前頁より続く)

(敬称略)

一口

- 金久秀司 佐藤三雄 山本喜三 窪田啓明 岩間義明 大村貞子 土井幸夫 吉長原正 小笠原芳子 中島節子 中西民子 小松幸雄 貝原光敏 八木悦代 青木賢一 塩飽俊行 山田勝代 龜田勝司 寺本幸司 石川定彦 森圭助 松山下英三 桑山由喜子 北森芳雄 栗坂七郎 松井功朗 杉本悦子 福田悦子 金村路一 若林宗彦 廣瀬吉彦 豊澤怜子 原口道子 本郷みちる 村岡昌彦 丹羽千代子 松羽裕美子 鏡原正彰 今野利通 浅野比佐夫 川人智廉 中川比智 井村廉

- 木寺攸一郎 丹下篤則 堀内芳春 片山啓介 向保光 久保清久 酒井清明 細谷卓爾 岩浅憲資 中本謙二 南章 田中サダ子 岩谷鉄雄 父川慧始子 河田雅光 越北哲男 川北陽子 高畑幸子 後藤博之 福家義弘 岡田孝一 大倉省三 宮本博 大西正信 山本悦子 山下陽一 宮野節久 大久保綾子 末武隆成 横田達昌 守武秀憲 田上隆生 畑中隆治 井家上英樹 今池匡子 久木道夫 平井順廣 小谷晶則 小濱正行 多田昭雄 中道克司 瀧石治子